

Title	書評 互盛央(著)、『言語起源論の系譜』(講談社、2014年)
Sub Title	Compte rendu : Tagai Morio, La généalogie des idées sur l'origine du langage, Koudan-sha, 2014
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.60 (2015. 3) ,p.231- 235
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Suzuki Junji et au professeur Hayashi Emiko = 鈴木順二教授・林栄美子教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20150331-0231

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

互 盛央（著）、『言語起源論の系譜』

（講談社、2014年）

小 野 文

infans, tis (in, fari), ¶ 1 qui ne parle pas : Cic. Div. I, 121 ; GELL. 5, 9, 1 || incapable de parler, sans éloquence : Cic. Br. 278 ; Or. 76 ; -tior Cic. Q. 3, 4, 1 ; -issimus Cic. Clu. 51 || incapable encore de parler, tout enfant : Cic. Verr. 1, 153 ; Clu. 27 ; de Or. 2, 162 ¶ 2 [subst] jeune enfant : Cic. Fin. 2, 33 ; CÆS. G. 7, 28 || enfant qui n'est pas encore né : Liv. 24, 10 ¶ 3 d'enfant, enfantin : Ov. F. 6, 145, etc. || [fig.] puéril : Cic. Att. 10, 18, 1 ¶ 4 = infandus : Acc. Tr. 189.

Dictionnaire Gaffiot latin-français (1934)

「こども」を指すラテン語 « infans » は、もともと「話さない者」「まだ話せない者」を意味すると言う。ここには「話す」という能力が人を「一人前」の人間にするという思考が反映されているようである。この語は後にスペイン語やポルトガル語で「王の子 infante」を指していくようになる。そうだとすれば19世紀初頭ヨーロッパの街角に現れたカスパー・ハウザー、バーデン大公家の後継ぎと目されて暗殺される少年は、まさに永遠の子供、話す人間になる前に殺される者、王の子、「infans」を体現する形象に違いない。

互 盛央（たがい・もりお）氏の著作『言語起源論の系譜』（講談社、2014年）は、「言語の起源」をめぐる言説を西洋思想史のなかに辿る試みである。「ことば」がどう生まれるか、「神」や「自然」「社会」によってどのように与えられたのか、という言語の起源問題は、人間の起源問題と結びつく。この複雑な関わりを、カスパー・ハウザーという形象に託して一気に述

べてみせたのが本書で、錯綜する筋にも関わらず、読者を引きつけて離さない語り口と博引傍証の手つきには圧倒されると言う他はない。各章とも論旨の展開は早く、ときに階段を一段飛ばしで昇らされているような気持ちになるが、諸家の議論を次々と結びつけていくスピードと高揚感は、そのままこの著者のもつ際立った知性の様を示している。

「言語の起源」や「ユートピア言語」を巡る論議のパノラマ的研究は、ヨーロッパでは既に幾つも存在しており、ウンベルト・エーコ『完全言語の探求』、マリナ・ヤグェーロ『言語の夢想者』、ジェラルド・ジュネット『パランプセスト』等は日本の読者にもよく知られている。「言語の起源／起源の言語」「純粹言語」「異言」「天使言語」「新造言語」……ユダヤ＝キリスト教的土壌から生成しているこうした珍奇なことばと言語論の陳列棚に、日本にいる私たちが興味を抱くとき、そこには少しばかりサーカスの見世物小屋を見るような覗き見の感覚があることを否めない。しかし日本語で書かれた本書が、そうした覗き見感覚と明確に一線を画しているのは、「近代」に連なる私たちもまた、問題の当事者であるということを、読後に深く感じさせるからである。

以下の小文では、本書の内容を検証するのではなく（それは筆者の能力を超えている）、理論的・思想的側面において特筆すべき点を挙げ、今年度サントリー学芸賞（芸術・文学部門）を受賞している書物の一端を紹介してみたい。

歴史の語り

プラトンからチョムスキーまで、ヨーロッパ大陸からアメリカまで、膨大な文献の時空間を縦横に行き来して書かれた本書は、互氏には三冊目の著作となる。氏の前二作『フェルディナン・ド・ソシュール——〈言語学〉の孤独、「一般言語学」の夢』（作品社、2009年）、『エスの系譜』（講談社、2010年）も西洋思想史の領域に属するものだったが、本書も合わせた三冊の中心にあるのは、一貫して言語の問題である。ただ著者が問題にする「言語」は、雄弁な言語ではない。むしろ沈黙する言語、言葉にならない言語、

どもりがちな言語、「あちら側から来る」言語、分析から逃れる言語であり、決して表舞台に出ることなく、人がつい目をそらしてしまうような、暗がりに潜む言語である。

現代において、2000年を超える時空間を切り取り、歴史叙述の方法を問題にせずに「西洋思想史」として日本語で何かを書くことは端的に言って難しい。それがここで成功しているとすれば、そこには幾つかの理由があるだろう。まず本書が理論的支柱としてミシェル・フーコーと彼の系譜学を標榜していることが挙げられる。ここでは「歴史」という「起源の問い」そのものが問題になっているのである。読み進めるうち、個人的には酒井直樹『死産される日本語・日本人』（1996年）が思い出された。言語の「起源の問い」を問うという姿勢において、対象となるものは違うにせよ、両書の理論的軌跡は非常に似通っている。そして両書の問いがそのまま読者に跳ね返ってくるという点でも同じである。

だがより大きな理由として、読者が本書に魅了されるのは、本書が「新しい歴史の語り（騙り）」を模索しているからではなかろうか。それは物語や虚構に近づこうとしているように見える。このなかで何度も言及されているカスパー・ハウザーは、厳密に言えば歴史上1828年5月26日ニュルンベルクの路上にふらつきながら現れた少年だけを指しているのではない。むしろ詩作や散文、歌、映像作品に数多く語られる架空の《カスパー・ハウザー》を指しているのであり、その意味では虚構化された少年が、本書の語る物語の主人公である。虚構の存在を用いてどのように歴史（＝物語）を語るか、という一つの挑戦を、ここに見ることができる。

しかし著者の企てはそれだけでは終わらない。本書を貫く導きの糸であるカスパー・ハウザー、——著者の言葉によれば「生まれ出ざる者」であり、同時に幾度も殺害され、いまま殺害されつづけているこの永遠の子供——を、自らの問題として受け止めること、これが日本語で書かれた「西洋思想史」、『言語起源論の系譜』の賭金だと思われる。

「私たち」を引き受ける文体

カスパー・ハウザーの物語を自分のものとして引き受けること、この「引き受け」には、二重の意味が伴う。なぜなら近代民主主義を生きる私たちは、カスパー・ハウザーであると同時にカスパー・ハウザーを殺す者でもあるからだ。本書は独特の文体を用いることで、読者とカスパー・ハウザーの同一化を図ろうとしている。この小文で『言語起源論の系譜』のディスカール分析を試みる紙幅はないが、本書が日本語の読者に突きつける問いを明確にするためにも、多少この書の文体に立ち止まってみる必要があると考える。

ふつう学術論文や研究書には非人称的な表現が用いられることが多く、また日本語では主語を避ける言い方ができるのは周知の事実である。しかしこれほど徹底して、いわゆる論文の「nous（我々、私たち）」が出てこない文章も珍しい。まるで「私たち」を用いることが、何かしらの罪に加担してしまうかのような慎重さである。この回避の振る舞いの意味は、例外的に「私たち」が使われている文章を取り出してみれば明らかになる。

p. 262 そのとき、私たちは、いつもカスパー・ハウザーにみずからの姿を見つける。

p. 345 そしてその世界にあるかぎり、私たちは何度も、そして何度でも、カスパー・ハウザーを生みだし続けるということだ。

p. 399 カスパーの物語は終わらない。今ここに、いつも天使が立ち続けているように、謎の殺人者が現れたアンスパッハの旧市街に、そして私たちが生き、語るこの世界に、今もカスパー・ハウザーは立ち続けている。

ここで用いられている「私たち」は、論文の「nous」ではなく、「今ここ」に生きて語っている「私たち」である。そして上記の引用や「あとがき」にも明らかのように、この「私たち」は、カスパー・ハウザーであると同時に、彼を殺害しつづける、近代を生きる者たちでもある。慎重に回避されている「私たち」は、それが現れるときには、カスパー・ハウザーを「引き受ける」ものとして使われているのである。ここに、著者が強い責任感を持って「私たち」を用いていることが分かる。

『言語起源論の系譜』読了後に、カスパー・ハウザーと呼ばれた子供の、言葉にならない叫びが耳について離れなくなる。その声は、私たちの頭の内側から響いてくるようである。他人事の歴史のように見えて、恐ろしくも本書は私たちの物語を語っている。